
メガネの魔法 7 ～初めてのクリスマス～

シマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネの魔法 7 〜初めてのクリスマス〜

【Nコード】

N7076P

【作者名】

シマ

【あらすじ】

私、遠藤裕美は彼氏いない歴〃年齢の不名誉から脱出し、上司兼恋人、山崎匠さんとお付き合いを始めたけれど、年末迫るこの時期、毎日残業。クリスマスなんて関係ない。そんな時、同級生に言われた言葉は……「メガネの魔法」その7 恋人編 裕美視点。

肌寒い季節。

街中には至る所にクリスマスグッズが溢れ、ツリーが色鮮やかに輝いている。クリスマス当日の今日は、多くの人で賑わっている。そんな喧騒を横に、私はため息を漏らした。

私、遠藤裕美（えんどうゆみ）二十歳。彼氏いない歴〃年齢の名誉から脱出し、恋人兼上司の山崎匠（やまさきたくみ）とお付き合いを始めた。

彼は、二十九歳の若さで課長に昇進。

仕事が出来て、クール。

社内の結婚したい男性No.1。

そんな彼は、年末迫るこの時期、仕事が忙しく毎日残業。デートもろくに出来ない日々が続いていた。体調を心配して毎日、彼にお弁当を作ってこっそりロッカーに入れる事くらいしか出来ない自分が情けない。

「お弁当以外に何か出来ないかな……」

入社二年目の自分には出来る仕事は少ない。会社からの帰り道、考え事をしながら歩いていたら人ぶつかってしまった。あちゃ……バッグの中身が……

「ごめんなさい！大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫……遠藤さん？」

「うん？後藤君！！」

ちらばったバッグの中身を拾いながら、久しぶり会った同級生と他愛もない会話をしていると、少しだけ気分が浮上した。

会社近くのベンチに座り、お互い缶コーヒーで暖を取る。高校時代を思い出し、頬が緩んだ。

「仕事帰り？クリスマスの予定はないのかよ」

「ほつといてよ！冴えないメガネっ子はモテないもん」

後藤……一言余計だ！懐かしいな下校時間まで友達とこうやって話したなあ。なんて思い出に浸っている私の横で、後藤君が急に真剣な声に変わった。

「それは、違うだろう」

「はぁ？違うないよ」それに彼は仕事だから、帰って寝るだけですわね」

私はのほほんとコーヒーを口にしたら、後藤君が真剣な顔で見詰めてきたから驚いた。な……何？何か雰囲気か……おかしいよ。

「こんな日に一人にするって最低じゃん。そんな男と別れて俺と付き合わないか？」

え……何を言い出すの？そんな男って……匠さんの事、何も知らないクセに変なこと言うなんて……

「そんなの……関係ない」

「お前より仕事を選んだんだろ。そんな男じゃ何時、お前捨てるか分からないぜ」

後藤君の言葉を聞いて、肩が震えた。悔しい……こんな事で動揺するなんて……でも、匠さん……寂しいよ……。ポロポロと零れ出した涙が止められず、袖で強く擦った。

「遠藤さん……ごめん。泣かすつもりじゃなかったんだよ」

後藤君が手を伸ばして来たけど、払い除けてそのまま俯いて涙を止めようと唇を噛んだら後ろから回された手に遮られた。

「切れるから止める」

後ろから聞こえた大好きな人の声。振り返ると同時に迷わす胸の中に飛び込んだ。

「匠さん！」

「ああ……泣くなよ……裕美」

背中に回す腕に想いと同じだけ力を込めると、匠さんも強く抱き締めてくれた。嬉しい……温かいくってこの胸の中は落ち着く。

「誰か知らないけど、こいつを不安にさせないでくれる？大事な彼

女だから、捨てるとか有り得ないからね」

「口では何とでも言えますよ」

後藤君？何に怒ってるの？……匠さんの腕の中では、彼の顔は見えなかったけど、匠さんが目尻に寄せた唇がくすぐったくて笑った。

「匠さん、お仕事は終わったんですか？」

「ああ……いや、まだだ。君の様子がおかしかったから、飯を言い訳に抜け出してきた」

悪戯っ子の様な笑顔を浮かべた匠さんは、何時もの恋人の顔で嬉しくてギュツと腕に力を入れたら苦笑した。なんで？

「バカ……こんな所で煽るな……今晚、家に行っても良い？」

耳元で囁かれて、腰砕けになりそう。頬が熱い。ただ、首を縦に振ると、ニツと意地悪な顔で爆弾を落とすのも忘れてない

「明日は休みだし、今夜は、寝かさないからね」

「ふえ！？な……なんで！！」

「そりゃ、残業続きで君が足りないからね。それと、毎日、お弁当ありがとう」

う……嬉しい言葉だけど、少し不安。明日の朝、動けるかなあ……

「遠藤さん」

あつ！すっかり忘れてたよ、後藤君。恥ずかしい事してないか私！！知り合いの前で抱き付くとかさ！！

「余計な事を言つてごめん。俺が言つた事は忘れてくれ」

目が合わせずらくて、俯いたまま頷いたら後藤君はため息を漏らした後、街中に消えて行つた。

イルミネーションの輝いている街中で、抱き合うカップルは自分たち以外にもいるから目立つ訳ではないけれど……

「匠さん、そろそろ放して下さいよ」

「アイツに何を言われたの？」

後藤君の言つた事は……匠さんの悪口だし言いたくないなあ……た……匠さん、目が怖いです。その目は危険なんです！

「言えない？」

「いえ……えっと、仕事を優先する人とは別れて付き合つてて……匠さん！！」

匠さんが黒い！！ひい！怖いです。

「あのクソツタレは、そんな事を言つて君を泣かせたのか」

「泣いたのは彼のせいじゃないです！自分のせいです！」

「自分の？」

「悔しかったんですよ。匠さんの悪口言われたのに言い返せなかった自分に……それに寂しくて」

口に出したら余計に恥ずかしい……この歳で寂しいって!!

……匠さん？なんで顔が赤いの？ニヤケてますか？

「それは……かなり嬉しい言葉だ……俺がいなとダメって事だろ？」

もう、口に出すのも恥ずかしくて黙って頷いたら、また耳元で囁かれた

「急いで終わらせるから、一時間待てる？」

「え？」

「もう、俺が我慢出来ない。裕美、君が欲しい」

首まで真っ赤になった私は、黙って小さく頷いた。待ち合わせの店を決めてから仕事に戻る彼の背中を見詰めていると、胸に溢れる幸せを感じてまた涙が零れた。

彼の傍にいれる幸せを胸に抱いて

メリークリスマス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7076p/>

メガネの魔法 7 ～初めてのクリスマス～

2010年12月25日09時55分発行